

安寧会の活動と今後

古橋勝也（京都府防災・原子力安全課）

安寧の都市ユニットは、2010（平成22）年に始まりました。筆者は、幸運にもその第一期生としてユニットの黎明期（混迷期?）から縁をいただきました。また、京都府庁に勤務していることもあって、ユニットの修了生組織である「安寧会」の会長席を温めています。

◇設立の背景と活動内容

ご承知のとおり、第一期生はその年の10月に受講を開始し、翌年4月からは第二期生と半期重なったため自然とつながりができました。しかし、第三期生以降は同様のつながりが期待できないことや、ユニットがもともと5か年計画であったために、ユニット終了後も、ここで得られた人脈を維持し、修了生による今後の活動の受け皿となるような場を求める声が高まり、第一期終了の際にこの「安寧会」は自然な流れとして発足しました。

「安寧会」の設立の目的は、規約上は、「修了生、現役ユニット履修生、ユニット関係教員との交流・親睦を深めるとともに、ユニットの発展及び安寧の都市の実現に寄与することを目指す」としています。

◇これまでの活動

これまで安寧会としては、主に以下のような活動を行ってきました。

- 新規履修生向けオリエンテーションのサポート
- 安寧の都市セミナーにあわせ教員、履修生、修了生の定例懇親会の開催
- 実践プロジェクト成果発表会等への参加

修了生だけの活動はほとんどなく、設立の目的にもあるとおり、教員や現役履修生との交流、親睦を深めるための活動です。これは安寧会の特徴の一つで、いわゆるOB会・OG会とは違った魅力だと思っています。

きまって修了生たちは、先輩風を吹かせながらも、（社会人履修生が多いので）本来業務との両立や業務へのいかし方のみならず、履修のコツや各教員のトリビアなどを助言したり、実践プロジェクトの苦労話を伝えた（聞いてもらった?）りして、第一期生の現役時代には安寧会はまだなかったので実際のところはわかりませんが、現役履修生のみなさんが円滑にユニットに参加できるよう、少しはお役に立てたのではないかと思います。

◇東日本大震災でいきた「顔の見える関係」

少し私事を述べることをご容赦ください。筆者は2002（平成14）年に京都府に入庁し、最初は医療行政を所管する部署へ配属されました。主に救急医療や災害

時医療の担当となったことを機に、災害救護や危機管理、消防防災といった分野に強い興味を持ちました。当時、訓練や会議で顔見知りとなった救急医や赤十字職員、警察、消防職員らとともに災害救護に関する勉強会を立ち上げ、細々とではありますが、今でも活動を続けています。

いまでこそ、「他機関連携」はどこでも共通認識となり、当然のように重要視されますが、当時は危機管理業界でもまだまだ縦割り感が根強く、「顔の見える関係」を趣旨としていたわが勉強会は先駆者だったと自負しています。ちなみに、ユニットの三谷智子特定准教授もこの勉強会のスタッフとして参加され、その縁もあって私はユニット第一期生となりました。

ユニットが始まったのは2010年度ですが、その年度末2011年3月11日、あの東日本大震災が起きました。筆者も震災発生直後に3週間ほど福島県に滞在し、被災地支援業務に従事しましたが、上記の勉強会メンバーやユニット教員、履修生からいただく助言や情報は的確で、たいへん心強かったと記憶しています。装備品としては何が必要か、現地までの道路状況はどうかなど、本当に欲しいと思った情報は組織間の無機質な連絡では得られず、こういった「顔の見える関係」から得られました。

当時、近畿府県からの支援はカウンターパート方式(岩手県、宮城県、福島県の3県に対し、担当府県を割り当て)で行っていました。そのため、福島県の支援を担当した京都府としては、岩手県、宮城県の状況がまったくわかりませんでした。履修生と修了生との情報交換でその隙間を埋めることもありました。その後も何回か現地派遣の機会があり、ユニットで得た他府県の状況や実践例の情報が奏功したこともありました。これも安寧会のなせる業でありましょう。

◇教員とのつながり

ユニット教員と深くつながっていることも安寧会の特徴です。つながりにかこつけて、私などは京都府が取り組んでいる地域の防災啓発事業(ワークショップや図上訓練など)の支援や講演にとどまらず、府の施策を進めるにあたっての検討委員会委員への就任依頼など、少し申し訳ないくらい、いろいろ先生方をお願いして、ほとんど便利使いに近かったかもしれません。私だけでなく、他の修了生からもさまざまな場面でユニット教員と仕事をしているのを耳にします。まさに、「安寧の都市の実現」に貢献できているのではないのでしょうか。

一方、履修生、修了生の側だけがメリットを享受しているのかと言えば、私はそうではないと思っています。これまでまったく気づきませんでした。行政や民間企業には、いろんな分野の学術研究に活用できる(あるいは必要な)データが埋もれているようです。公開されていなかったり、公開されていても二次利用に適さない形式であったり、行政ならすぐにでも入手できるものであったりときまぎまぎですが、安寧会のネットワークがあれば、その入手のハードルは相当下がるように思います。

安寧会を通じて教員の皆さまとも太いパイプが構築できるわけですから、今

後は修了生の側からも、ユニット教員の教育・研究活動のお手伝いができるような仕組みを構築できればと考えています。

◇安寧会の今後の活動

安寧の都市ユニットは、残念ながら2014年度で終了となりますが、せっかく構築したこのような人的ネットワークを持続させたいという思いは、教員、履修生ともに共通したものでしょうし、安寧会がその役割を担うべきというのも、共通したところだと思います。

そこで、本原稿を書くにあたって、安寧会の各幹事役にもご意見をうかがいました。なお、ご意見を求めたのが遅く、意見を出す暇がなかった各幹事役にはこの場を借りてお詫びいたします。

◇今後の活動のアイデア

●第三期生 五十嵐敏郎さん

大人数が参加した安寧会も楽しい思い出だが、私には10名以下の少人数で、講師の先生を囲んでじっくり議論した安寧会がとくに印象深い。このような機会に会話の技術を磨き、私の専門とは異なる分野に関心をもつきっかけを得た。「ありがとう！安寧会」という心境である。

セミナーの後で安寧会をもつことは今年度で最後である。来年度以降にも安寧会を継続する方法として、安寧会が独自で講演会(名前は募集)を開催し、メンバー2~3名が交代で講師を務め、そのあとで安寧会を開くことを提案する。必要なら、講師の一員を務めてもよいと思っている。

●第四期生 前田修さん

月1回のセミナー実施後に講師の方と参加者が場所を移動して、懇親会を実施できたのは大変よかった。セミナーは講師からの一方通行になりがちだが、その後に議論を深めることで、みずからの疑問が解決するきっかけを提供できたのではないか。

また、第一期生から第五期生がおなじ場所にいる機会があることで、先輩から現役生への研究に関するアドバイスも得られ、大いに参考になった。ユニット終了後も、修了生は研究の成果をどう活用しているか、各現場でどんな活躍をしているか、年1回は意見交換をする機会を設けたい。

*

ということで、今後の安寧会の方向性も見えたようです。ユニットが終了するとともに、安寧会の果たすべき役割は高まります。まずは存続していくことが重要ですが、来たる大震災にそなえて、もちろん安寧の都市の実現に向けて、この安寧会が少しでも役に立つことができたら、ユニットの5年間は意義のあるものになるんだろうと思います。